

語学強化法としての通訳訓練法とその応用例

瀧澤 正己*

Interpreter Training Techniques
and Their Application as a Tool for Language Enhancement

Masami Takizawa *

Received October 31, 2002

1. はじめに

グローバル化の波と共に民間、公共を問わず英語教育機関にコミュニケーション能力の養成が求められて久しく時が経つ。この要求に呼応するかのように、「通訳演習」、「通訳法」、「通訳技法」、「英語コミュニケーション技法」など、名称にはばらつきがあるものの、通訳訓練法のノウハウを使った英語教育が日本の大学・大学院で導入され始めている。外国語を駆使し、二言語間での意思疎通を生業とする人物を養成する方法があれば、それを外国語教育に取り入れるのは至極当然と言えるであろう。

しかしながら、過去において大学などの高等教育機関からは通訳養成は一種の「職人育成」で、通訳は大学教育にはなじまないとされ、「通訳理論という言葉をつかっただけで失笑がもれるというような事態（近藤1997）」が長く続いた。このため、少数の大学の通訳講座を除き、日本の通訳教育はサイマル・アカデミー、インタースクール、アイ・エス・エスなどを筆頭に、民間の通訳養成機関が手掛けてきたものである。換言すれば、通訳養成・通訳研究は学問領域とは見なされず、民間教育機関で辛うじて生き延びてきたと言えるであろう。このため諸外国、特に欧米と比べ、わが国の通訳研究は大幅に遅れているのが実情である。日本の通訳研究は1990年に近藤、三浦⁽¹⁾を中心に現役通訳者が「通訳理論研究会」を立ち上げ、その通訳理論研究会を母体とした「日本通訳学会」が2000年9月に発足し、2002年9月に日本学術会議の学術団体として認定・登録されたばかりである。

上述の理由等に拠る通訳研究の立ち遅れから、わが国の通訳養成機関で使われる訓練法の多くが、(1) 個々の指導者の経験から編み出されたもの、(2) 指導者自身が通訳訓練生時代に体験した指導法、(3) 欧米のノウハウをそのまま取り入れたもの、あるいはこれらのミックスが主流で、理論的裏付けに乏しいとの批判を甘受せざるを得ない一面を有している。その上、欧米における通訳養成は「会議通訳のスキルのみを取得させることを目的とする（ビュテル延

* 外国語学部
Faculty of Foreign Languages

増1996)」が、わが国の通訳養成には通訳スキルの取得と同時に対象言語の習得が求められているため、純粋な通訳訓練よりも語学訓練に重点が置かれているのが実情である。

以上の点を踏まえ、本稿では通訳訓練法の中でも語学学習に応用可能な各種訓練法を概観し、更にそれらの訓練方法を取り入れた大学レベルの英語力強化方法を「学習メニュー」として呈示してみたい。

2. 目的別訓練法

日本と欧米における通訳訓練の目的上の差異は前節で触れたとおりであるが、訓練法を目的別に語学力強化と通訳技能取得に分類すると、およそ次のように大別される。

語学力強化

- (1) シャドーイング
- (2) リプロダクション
- (3) 区切り聞き
- (4) スラッシュ・リーディング

通訳技能取得

- (5) サイト・トランスレーション
- (6) ノート・テイキング
- (7) 逐次通訳
- (8) 同時通訳

3. シャドーイング

シャドーイング (shadowing) は、「フォローアップ (follow-up)」,あるいは「同時リピート」とも呼ばれ、聞こえてくるモデル音声を、イントネーション、アクセント、発音、ストレス、音の連結や弱化・吸収、間の取り方などのプロソディー (prosody) をそのまま真似る口頭反復練習のことである。通常のリピート練習と大きく異なる点は、モデル音声が進んでくれない点である。モデル音声にはポーズが入らず、学習者は懸命にモデル音声を追いかける。いくら同時にリピートしても学習者はわずかに遅れるので、そのずれの分だけ短期記憶に負担がかかる。外国語を聴きながら同時に話すというのは初心者には想像以上に困難であるが、教材レベルが適切で、テープ速度も遅めのものならば短期間でこなせるようになる。同時リピートに慣れてきたら、リピート開始を数語遅らせ負荷を大きくしながら練習する。

シャドーイングは、耳と口の分化を可能にする練習として同時通訳の基礎訓練の位置付けで世界の通訳養成機関で長年採用されてきた。しかし、1980年代後半から欧米の通訳養成機関では、シャドーイングは起点言語を忠実に模倣することから、通訳の際に起点言語構造に囚われ過ぎて目標言語への自由なメッセージ変換を阻む恐れがある (瀧澤1998)、との理由で欧米では以前ほど活用されなくなっている。このように通訳技能取得としてのシャドーイングには賛否両論があるものの、否定派を含め数多くの通訳教育関係者が語学力向上としてのシャドーイングには肯定的である⁽²⁾。

3.1 シャドーイング指導

シャドーイングの最大の困難は練習の時間的切迫度にある。そのため、慣れないうちはシャドーイングに気を取られ、内容把握ができないがそれでも構わない。まずはできるだけ忠実にモデル音声を真似ることを課題とする。慣れてきたら [キーワードの聴き取り 大意把握] を

課題に加える。指導時の留意として以下の点を挙げておく。

- ・途中でつかえても、次に聞こえる箇所から再スタートし、とぎれとぎれでも必ずモデル音声の最後の箇所までついていくように努める。
- ・モデル音声に集中するためと自分の声でモデル音声が聞き消されないように、必ずヘッドホンかイヤホンを装着する。
- ・初心者はテープ速度が100～120語/分程度のゆっくりとしたものからスタートし、徐々に速度の速い教材に移行していく。
- ・コツが掴めない場合は、自由に使える母語（日本語）のテレビやラジオのニュースなどで練習するのもよい。
- ・初心者は予めテキストの不明な語句の発音と意味を調べ、英文のおおまかな内容を把握した後、テキスト英文を見ながらモデル音声に合わせて音読練習を2～3回おこない、その後シャドーイング練習に移る。慣れてきたら初見の教材でも練習してみる。
- ・初めは正確にモデル音声を再生することに集中し、慣れてきたらモデル英文の意味を考えながらシャドーイングをおこない、英語音と意味の一体化を図る。
- ・シャドーイングの上手さと聴き取りの理解とは必ずしも一致しない。理解には意味の固まり（意味単位）の組み合わせからメッセージを理解できなければならない。
- ・音声速度が速すぎて口頭ではついていけない場合は、声を出さずにおこなうシャドーイング（サイレント・シャドーイング）をおこなっても、シャドーイングの一定の効果は期待できる。
- ・モデル音声にピッタリとついていくシャドーイングに慣れてきたら、モデル音声からわざとずれるシャドーイングを練習する。但し、大きく遅れると練習の負荷が増大するので初めは3～4語程度の遅れにとどめる。
- ・不完全なまま次の音声教材に移るのではなく、できるだけ完璧にモデル音声を再現できるまで同じ教材で練習を続け、途中で自分のシャドーイングを録音しモデル音声と異なる箇所をテキストでチェックすれば、プロソディーの矯正に役立つ。

3.2 シャドーイングのメリット

モデル音声のスピード、イントネーション、アクセント、発音、間の取り方をそのまま真似ることになるので、自然な英語の流れやリズムの体験と習得が可能となる。換言すれば、自発的発話ではないものの、スピーキングとリスニングを同時におこなっているとも言える。効果として期待できるのは以下の点である。

- ・プロソディーの向上
- ・自分の聴き取れない箇所がはっきりわかる 言えない箇所が聴き取れない箇所
- ・集中力の養成
- ・短時間の練習で多量の英文を練習できる
- ・英語の自然な発話速度についていけるようになる

4. リプロダクション

リプロダクション (reproduction) は「逐次リピート」とも呼ばれ、モデル音声をフレーズ等の意味単位でポーズを付け、聴き取ったフレーズをポーズの箇所まで、できるだけ正確にリピートする練習である。初心者や英語力の低い学習者の場合にはフレーズ単位に区切り、短期記憶への負荷を最小限に押さえて練習する。英語力の高い学習者では複数のフレーズを合体したり、センテンス単位で練習するが、リピートするフレーズが長くなればそれだけ記憶への負荷が増し、練習の困難度も増大する。

この練習の主目的は英語の形 (form) に焦点を当てた英語のインプット練習ではあるが、インプット (聴き取り) アウトプット (口頭によるリピート) を連続しておこなうことからリスニング力を伸ばすだけでなく、スピーキング力向上にも役立つとされている。

英語力のある人がリプロダクションをおこなうと、時折、モデル音声とは異なる言い回しを使って英文を再現する場合がある。例えば、

(モデル音声) The Asian region has experienced phenomenal economic growth over the last two decades.

(リプロダクション) The Asian region has experienced remarkable economic growth during the past twenty years.

下線部がモデル音声と異なる箇所であるが、意味の上では差異はない。この現象は、下線部の元の語句を含めモデル英文の意味を学習者が正確に理解していることを示すものなので、モデル英文から大きく意味がずれたり、意味をなさない英文を再現しない限り矯正の必要はない。

5. スラッシュ・リーディング

スラッシュ・リーディング (slash reading) とは、英語の文章を文頭から、情報単位ごとにスラッシュ (/) を入れながら読み進むリーディング法である。文全体の意味が取れるまで、つまり、文の終りまで読み進んでしまうのではなく、一応意味が取れた箇所ですラッシュを入れる。スラッシュを入れる位置は自分なりに意味が取れたところで構わない。初心者の場合は、スラッシュを入れる情報単位はフレーズ単位で取り、慣れるに従って複数のフレーズを組み合わせた長い情報単位ですラッシュを入れていく。

スラッシュ・リーディングは、情報単位に分けて英文情報を文頭からオンラインで処理していけば、長く複雑な文も理解しやすいという考えから編み出されたもので、後述するサイト・トランスレーションの前段階の練習である。更にスラッシュ・リーディングは、我々日本人英語学習者に長年染み込んでしまった「返り読み」からの脱却を可能にしてくれるリーディング法でもある。例えば、「返り読み」と「スラッシュ・リーディング」の情報理解のプロセスを次の英文で比較してみる。

The large transnational companies/ of the US, Europe and Japan/ are almost falling over

themselves/ to invest in the emerging markets/ in the region./

(返り読み訳) 「欧米、それに日本の」 「多国籍企業は」 「その地域の」
「新興市場に投資するために」 「懸命になっています」

このように「返り読み」では、日本語のシンタックスに合わせるために、[
]のような行きつ戻りつの複雑な視線移動が必要になる。

(スラッシュ訳) 「多国籍企業は」 「欧米や日本の」 「懸命になっています」
「新興市場に投資するために」 「その地域の」

「返り読み」に対して「スラッシュ・リーディング」では[]と、文頭からオンラインで理解が進み、「返り読み」のようにボトムアップ処理をフル回転しながらの行きつ戻りつの複雑な情報処理が不要なため、学習者にはトップダウン処理にまわす精神的余裕が生まれ、当然、読みの速度もアップする結果となる。このスラッシュ・リーディング技法をリスニング練習に応用したものが後述する「区切り聞き」練習である。

5.1 スラッシュ・リーディング指導上の留意点

スラッシュ・リーディングは英文情報を理解することが主眼であり、導入時の説明を容易にする場合以外は、必ずしも日本語に訳さなくてもよい。訳す場合でもスラッシュごとに訳すので不自然な日本語訳になることを、指導者と学習者は心得ておく必要がある。「同時通訳方式」と称して市販されている英語教材の日本語訳は「スラッシュ訳」であり、実際の同時通訳の日本語訳とは異なる。その他の指導上の留意として以下の点を挙げておく。

- ・スラッシュは情報単位ごとに入れるのが基本だが、個人差があっても構わない。
- ・初心者や英語力の低い学習者の場合は、フレーズごと(5 ± 2 語程度)にスラッシュを入れ、情報単位を余り長く取らないように指導する。
- ・スラッシュを入れると同時に意味が取れるように、素早い意味取りを絶えず心掛けて練習する。その意味でも二度読みは厳禁とする。
- ・短いフレーズごとの意味取りに慣れてきたら、複数のフレーズを合体させた長い情報単位で意味内容を把握する練習に移行させる。

6. サイト・トランスレーション

スラッシュ・リーディングを実際の同時通訳の形に近付けたのがサイト・トランスレーション(sight translation, 以下サイトラ)である。同時通訳は起点言語が聞こえ、情報がある程度まとまって理解できた時点で通訳作業を開始するが、サイトラは目で起点言語を追いながら、英文情報の一部が理解できた時点で目標言語に口頭で訳し始める。いわば、紙の上の「同時通訳」とも言える。

サイトラとスラッシュ・リーディングの違いは、スラッシュ・リーディングは基本的にはフレーズ単位で情報を理解する(場合によっては訳す)が、サイトラは情報を合体させながら訳出していく。サイトラの訳出プロセスの具体例を挙げてみる。

The large transnational companies/ of the US, Europe and Japan/ are almost falling over

themselves/ to invest in the emerging markets/ in the region./

The large transnational companiesまで読み、「多国籍企業は」と訳出を開始しようとする
と、次のof the US, Europe and Japanが目飛び込んでくる。そこで初めの「多国籍企業は」
の訳出を捨て、「欧米や日本の多国籍企業は」と訳出を開始する。訳しながら目はare almost
falling over themselvesを捉え、「懸命になって」と訳出を続ける。その間にもto invest in the
emerging marketsが目に入ってくるので「新興市場へ投資しています」と訳そうとするが、
in the regionがほぼ同時に目飛び込んでくるので、to invest in the emerging marketsは一
時的に記憶(retain)しておき、「その地域の新興市場へ投資しています」と文を締めくくる。
結果として「欧米や日本の多国籍企業は懸命になって、その地域の新興市場へ投資しています。」
の訳文が完成することになる。訳文からは返り読み訳との違いが見えないが、情報処理の順序
が異なる。サイトラもスラッシュ・リーディングと同様に、情報処理は[]
のオンラインで進む。

上述の訳出は一例であり、訳出を「多国籍企業は」で開始してしまった場合は、of the US,
Europe and Japanが視野に入った時点で「それは欧米や日本の企業ですが」と多少説明の言
葉を追加する必要が出てくる。後半部分も「懸命になって、新興市場へ投資しています」と訳
出した場合には、文末のin the regionは「その地域では市場が数多く誕生しています」と文意
を変えないように、言葉を補いながら訳出を終えればよい。

スラッシュ・リーディングのスラッシュごとの日本語訳とは異なり、サイトラは日本語とし
て許容範囲内の訳出を心掛ける。同時通訳は短時間で情報処理をおこない、聴衆に理解しやす
い形で目標言語に訳出しなければならない。サイトラは起点言語の意味内容に即した訳語を瞬
時に選択し、できるだけ解りやすく目標言語に訳出する練習である。サイトラが同時通訳の基
本練習として世界中の通訳学校で取り入れられている理由がここにある。

6.1 サイトラ導入上の留意点

サイトラは起点言語の文意に焦点をあて、聞いて違和感のない目標言語にいか直していく
かという練習である。そのためには、起点言語の品詞を無視しなければならないことが多々あ
る。英語の名詞は日本語訳でも名詞のまま訳す等、起点言語の品詞を目標言語でも同じ品詞で
訳すように指導されている多くの日本人英語学習者にとって、初めは大変な苦痛を伴う練習と
なる。そこで、導入の際にはいきなりサイトラに入るのではなく、スラッシュ・リーディング
を十分練習した後にサイトラを導入するほうが学習者には抵抗が少なく済むであろう。練習上
の留意点を挙げておく。

- ・原則として一度読みで訳していく。
- ・スラッシュ内(意味の固まり)の訳し方は「返り読み」で構わない。
- ・原文が長い場合は、訳文も原文に合わせて長くするのではなく、複数の短文に分けた方が
すっきりとした判り易い訳文ができる。
- ・英語の動詞は記憶しておき、日本語訳の文末に入れた方が自然な日本語になる。
- ・関係代名詞や関係副詞が導く節も文頭から順送りに訳す。

(例) This is the town/ where he was born and grew up./

この町で/彼は生れ育った。

I met a man / who used to be one of the richest men in this town./

ある男に出会った。/その人は昔この町で指折りの金持ちであった。

- ・文を締めくくりにくい場合は、原文の意味内容を大きく変えない範囲で原文にはない言葉を使っても構わない。また、説明的に言葉を補足するのも構わない。

A lot of scientific evidence shows/ that smoking is not bad for the health./

多くの科学的根拠によると/喫煙は健康に悪くはなさそうです。

- ・スラッシュ・リーディング同様、初めはスラッシュを入れながら原文の意味取りと訳出を練習するが、最終段階ではスラッシュを入れずに、聞いて違和感のない日本語に訳出できることを目標とする。
- ・訳出は必ず口頭で声を出しながらおこなう。通訳訓練を意識した練習では文末を「です、ます」調にし、明確ですっきりした訳出を心掛ける。
- ・練習中に適切な訳語が思い浮かばない場合は、原語をそのまま目標言語に入れて訳出しても構わない。
- ・途中で意味の分からない箇所があっても、そこで練習を中断せずに最後まで練習を通しておこなう。
- ・意味不明の箇所はそのままにせず、必ずテキストに当たり意味を確認しておく。

7. 区切り聞き

原文の意味内容が一通り理解できている音声教材を使っても、いきなり同時通訳の練習に入ると訳語を考えているうちに起点言語はどんどん先に進んでいってしまい、通訳することが不可能になってしまう。「同時通訳」と言う時間の制約が大きな原因である。この時間の制約を取り除くためにテープ音声にポーズを付け、そのポーズ内で目標言語に通訳する練習がある。この練習を「区切り聞き」と呼ぶ。区切り聞きは、聴き取った英文を瞬時に理解する力を高める練習である。区切り聞きは初めはフレーズ単位でポーズを付け練習し、慣れてきたらセンテンス単位の練習に移行し、ポーズの頻度を徐々に減らし、最後にはポーズなしの音声で同時通訳練習に移行していく。この練習形式は、「スラッシュ・リーディング スラッシュ訳 サイトラ スラッシュを入れないサイトラ」の音声版と言える。

7.1 区切り聞き導入上の留意点

区切り聞き練習は、同時通訳への橋渡し練習として位置付けることができるが、練習目的としては、英文シンタックスに沿いながら、瞬時に原文の情報理解を積み重ねることにある。そのため、フレーズ単位での区切り聞きでは特に自然な日本語訳にこだわる必要はない。その他の留意点として以下の事項を挙げておく。

- ・テープ速度が早すぎるとポーズを入れにくいので、100～120語/分程度の速度の遅い音声教材で練習する。
- ・スラッシュ・リーディング同様、あまり短いフレーズごとにポーズをつけると訳しにくい。

- ・練習中に適切な訳語が思い浮かばない場合は、サイトラ練習同様、原語をそのまま目標言語に入れて訳出しても構わない。
- ・途中で意味の分からないところや聴き取れない箇所があっても、そこで練習を中断せずに最後まで通して練習する。
- ・最後に必ず英文テキストを見て、意味不明の箇所や日本語に置き換えにくい箇所を学習しておく。そのためにも、英文テキストがついているテープ教材を利用する。

8. 通訳訓練法を取り入れた学習メニュー

日本人は英語を音声言語として理解するのが苦手とされているが、音声言語を理解するにはおよそ次のプロセスが求められるであろう。

[単語の聴き取り 複数語から構成されるフレーズ単位（意味単位）の理解 フレーズの組み合わせからセンテンスとしての理解 センテンスの組み合わせからパラグラフとしての理解]

のプロセスを可能にするには、背景知識や情報の内的枠組み（schema）を活用したトップ・ダウン処理と文法・構文解析をとおして理解していくボトム・アップ処理の二つの処理法を駆使できなければならない。しかしながら、リスニングを苦手とする日本人英語学習者の多くは、音声速度の遅いものならば辛うじて理解できるが、速度が速くなると理解できなくなってしまう傾向にある。これは学習者の情報処理速度が遅いことが原因である。シャドーイング練習を数多く実践し、自然な音声速度に慣れるとともに、スラッシュ・リーディングや区切り聞き練習等で、単語単位ではなく、情報単位で英文を理解するように常に心掛け、その目的に即した練習を継続的に実行することが肝要であろう。また、常に構文を意識しながら聴くことも大切である。この意識があると、情報理解の精度は確実に高まる。聞こえた単語を背景知識や常識だけでつなぎ合わせ意味を推測する「サバイバル英語的リスニング」だけでは真の聴解力はつかない。

次に、これまで述べてきた通訳訓練法を取り入れた英語学習法の例を呈示してみる。

通訳訓練法を取り入れた英語学習メニュー

- (1) テキストは見ずに、テープを再生して1～2回聴く。原文内容の概要がほぼ理解できれば(5)から学習を開始する。あまり理解できなければ、(2)から開始する。
- (2) 黙読でスラッシュ・リーディングをしながら、テキストの未知語をマークする。
- (3) 未知語の意味・発音を調べる。
- (4) 再度黙読で、意味を取りながらスラッシュ・リーディングをする。
- (5) シャドーイングをする。

思うようにシャドーイングができない場合は、テキストを見ながらモデル音声に合わせて2～3回音読練習をした後、シャドーイング練習を再開する。

70～80%程度の精度で原文に忠実にシャドーイングができるまで練習を繰り返す。一通り正確にシャドーイングできるようになったら、自分のシャドーイングを別の

- テープに録音・再生し、モデル音声と自分のシャドーイングを比較し、モデル音声とプロソディーの異なる箇所をテキストにマークする。
- (6) テキストのマークの箇所に注意を払い、テキストを見ながら数回モデル音声にあわせて音読しプロソディーを矯正後、再びシャドーイング練習をする。
 - (7) スラッシュの入ったテキストを黙読しながら、声を出しながら日本語にスラッシュ訳する。時間の余裕があれば、音声化したスラッシュ訳をテープに録音しておくか、紙に文字化しておく。
 - (8) モデル音声に適宜ポーズを入れ、聴き取った英文をリピートする(リプロダクション)。
 - (9) モデル音声に適宜ポーズを入れながら、聴き取った英文を声を出しながら日本語に速訳する(区切り聞き)。
 - (10) 次に、モデル音声から3～4語くらい遅れながらのシャドーイングを試みる。この練習に慣れてきたら、遅れる語数を徐々に増やしながらかシャドーイングを試みる。
 - (11) 意味を考えながらシャドーイングを試みる。
 - (12) 原文音声を聴くと同時に、テキストを見ながら、日本語に訳してみる(同時サイトラ)。
 - (13) (1)～(12)の練習を十分おこなった後に、仕上げとして(7)で紙またはテープに残した日本語のスラッシュ訳を英語に再生する練習を試みる。テキストに日本語の対訳がある場合は、対訳の日本語を英語に直してみてもよい。

9. おわりに

本稿では、通訳訓練法の中でも語学訓練に役立つと考えられる訓練法を概観し、併せてその訓練法を取り入れた英語学習メニューを呈示してみた。本稿の学習メニューは大学生レベルを想定してあるが、ここまで紹介した訓練法の中には、教材選定が適切ならば中学・高校生にも実践できる訓練方法もある。その上、教室における授業の一環としてだけでなく、テープレコーダさえあれば学習者が独学でも音声訓練をおこなうことができる。学生・生徒に英語学習の指針を示す意味でも、語学教育に携わる方には指導法のレパトリーの一部として是非取り入れて頂きたいと願っている。

もちろん通訳訓練法だけで、ともすれば「非効率的」とレッテルを貼られる日本の英語教育が抱える問題がすべて解決できるものではない。しかし、通訳訓練法はいずれの訓練法も学習者が自ら積極的に声を出し、練習に参加しなければ成り立たないものばかりである。その意味からも、音声訓練不足が叫ばれている日本の英語教育に寄与できる可能性が大であると言える。

註

- (1) 近藤正臣 会議通訳者、大東文化大学経済学部教授
三浦信孝 中央大学文学部教授 専門はフランス語・フランス文学
- (2) 染谷は同時通訳の基礎訓練としてのシャドーイングには一貫して否定的立場を取っているが、プロソディー養成には非常に有効であるとしている。

参考文献

- 北村利治他（1998）『始めて学ぶ翻訳と通訳』松柏社
- 近藤正臣（1997）「日本における通訳研究」『月刊言語』26巻9号，pp.20-27，大修館書店
- 染谷泰正（1994）「英語通訳訓練法入門セミナー」『通訳事典'94』pp.100-149，アルク
- 染谷泰正（1998b）「プロソディーセンス強化訓練の効果に関するアクションリサーチ」『通訳理論研究』14号，pp.4-21，通訳理論研究会
- 瀧澤正己（1998）「通訳訓練法の英語学習への応用（1） シャドーイング 」『北陸大学紀要』第22号，pp.217-232，北陸大学
- 瀧澤正己（1999）「通訳訓練法の英語学習への応用（2） リーディング 」『北陸大学紀要』第23号，pp.159-170，北陸大学
- ビュテル延増崇子（1996b）「E S I T における会議通訳者の養成」『通訳理論研究』11号，pp.66-77，通訳理論研究会